

大麻文化科学考¹⁻²⁹

(その25)

渡辺 和人^{*}、木村 敏行^{*}、宇佐見 則行^{*}、山本 郁男^{**}

A Study on the Culture and Sciences of the Cannabis and Marihuana XXV¹⁻²⁹

Kazuhito Watanabe^{*}, Toshiyuki Kimura^{*}, Noriyuki Usami^{*}
and Ikuo Yamamoto^{**}

大麻文化科学考 1-29

(その 25)

渡辺 和人*、木村 敏行*、宇佐見 則行*、山本 郁男**

A Study on the Culture and Sciences of the Cannabis and Marihuana XXV 1-29

Kazuhito Watanabe*, Toshiyuki Kimura*, Noriyuki Usami*
and Ikuo Yamamoto**

Received December 4, 2014

Abstract

There are many novels that deal with marijuana as drug novels. Among them, the novel entitled “Kaigo-nyumon” written by Mr. Norio Mob was to win the Akutagawa Award in 2004. A marijuana user appears in the novel. We thought that a part of the novel was written by the author under the influence of marijuana. This review critically analyzes the contents of the novel from a scientific point of view.

第 25 章 大麻文学：モブ・ノリオ著「介護入門」

第 1 節 はじめに

薬物小説：Drug Novel とは、作家が自ら薬物（覚せい剤、幻覚薬、興奮薬等）を摂取し小説を書く、あるいは小説の主人公または登場人物が薬物中毒者である場合などがある。前者として織田作之助の「夫婦善哉」や坂口安吾の「白痴」であろう。彼らは実際に覚せい剤（メタンフェタミン、ヒロポン）を打ちながら小説を書いていたそうだ。大麻を扱った小説は、松本清張、中島らも等、我が国でもいくつか知られている。後者の場合もその状況を描写するにあっても、恐らく作家は実際に薬物を服用するか注射している可能性が強い。文献のみでは臨場感はないであろう。歴史的には古く 1000～1500 年前、イスラム教圏において「千夜一夜物語」の中に大麻を賛美する読み物、詩歌にしばしば登場する。また、1840 年代、フランスにお

* 薬学部 Faculty of Pharmaceutical Sciences

** 北陸大学名誉教授 Professor Emeritis, Hokuriku University

いて急に芸術家達の間で大麻吸煙の風習が流行した。この発端はジャック・モロー（精神医学者）による「大麻によって私は全くの幸福を味わった」と自身の体験を発表したことにある。これを契機として1850年代にパリのホテル「ピモダン」において「大麻クラブ (Le Club des Hachichins)」が生まれ、会員としてゴーチュ、パルザック、ボードレール、大デュマらの作家がいた。デュマの「モンテ・クリスト伯」の中には大麻の媚薬的効果の詳細な記述がなされており有名となった。この過程でいわゆる Drug Novel が流行した。特に「大麻食用者」は、フィッツ・ヒュードル（アメリカ）の作品で大麻を實際吸いながらの記述でドラッグ文学の最高峰とされている。Bayard Taylor（アメリカ）は、「大麻吸煙体験記」を発表、大麻の驚くべき精神作用の実験を著した。このように「薬物と文学」は古くから作家にとって魅力的な執筆活動の素材であり、作品中に登場させなくても、薬物が書くことへの駆動力となったことも事実である。

ここに至って、平成16年（2004）上半期、突如として芥川賞に「大麻吸引者が老女を介護するという小説」の中心として大麻の幻覚作用が使われている作品が選ばれた。当時、我々は「大麻の薬理毒性の研究」を遂行中であり、いくつかの大麻の有害性についての知見を得、大麻有害論の立場から学会等で報告し、大麻無害論者に対し警鐘を鳴らしていたが、文学にはずぶの素人であったため何らコメントもできず、ただ看過の術しかなかった。ところで、10年を経た今この問題を科学的立場からここに取り上げることにした。何故なら本シリーズ、「大麻文化科学考」の必然の題材であると考えたからである。

第2節 大麻文学「介護入門」を科学する（『 』中の文章は原文を示す）

『青い絵の具の点々が、水を含み過ぎた絵筆の先からぼとぼと滴り落ち、白い画用紙の上で青と水の色の染みになって、みるみる広がってゆく。』で始まる「介護入門」は第131回平成16年度、上半期に選出された芥川賞（文学界六月号）の作品である³⁰。選考委員会のメンバーは、池澤夏樹、石原慎太郎、黒井千次、河野多恵子、高樹のぶ子、古井由吉、宮本輝、山田詠美（三浦哲郎、村上龍は欠席）と錚々たる方々である。古井氏以外、選者に誰一人、双手を上げて推しているのでもないのに賞に選ばれるとは文学に疎い我々でさえ不思議に思われる。まして、「乱用薬物」の一つとしての大麻の薬理・毒性を研究し「大麻取締法」の存在の意義を考慮中の我々にとって、対象の大麻について選考委員の諸先生の全てが理解しているかどうか疑わしい。しかし、この問題は芥川賞（文学賞）とは直接的無関係と考え無視することにする。

この小説の冒頭の文章はさらに続く。『・・・滲む色彩の速度に追いつけず、ただ何かしらの変化が起こったことは思い起こさせもする波の感触とともに、俺は取り残されてしまう。そしてありもしない黄色の残像をそうと知りつつ、視界の隅へ隅へと追いかける — それが時折ちらりと見えてしまうものだから。』大麻の薬理毒性作用の動物実験（我が国では基本的にヒトでの実験は許されていない）を要約すると「興奮、鎮静、異常行動」とされている²⁷⁻²⁹。さすれば青絵具の描写といい、上記の黄色の残像の表現は一種の異常感覚（幻視）とみることも出来る。主人公が大麻中毒者の可能性は、文章の数行をとっても明らかである（下線部分）。しかし、一方このような表現は大麻吸引者でなければ書けないと断言することも難しい。従って、全文にわたって科学的な裏付け調査を一つ一つ実証的にすすめるべきではない。

冒頭の文章は一般的に作家の心の吐露であり、表現でもある。故に一語一句も略せぬ。本文に戻る。『直径二、三〇センチの毬か影か見えるのは、決まって視界の最左端か最右端ギリギ

りに現る湿気た^{もや}霧の黄色、血にグリーンの切れた頃合いを見計らってか、網膜の裏でこいつが静かに発光をする。他の誰にも悟られずに灯る黄砂の潤いを医者はずただの幻覚だと嘲笑うだろう — いもしない医者に笑われる俺を想像して笑った。』ここで作者は明確に幻覚という語を使っている。大麻吸煙者はよく笑うという。嬌笑とも書く。わずか三行にもみたくない文章の中に笑という文字が3つも出てくる。さらに続く『バケツ代わりにしたホウル・トマトの空き缶では筆に着いた色が流れて尚も溶けず、薄膜様の青いぐにやぐにやが水の表面で実にゆっくり動き廻るから、つい今し方生まれたてのペットのようでいとおいしい。缶の内側が銅色に反射するのが一層青の大理石模様を際立たせ、ぼんやり眺めているうちにさっきまで青と映っていたその色が黒くも赤くも見える気がして、ついに何色だか分からなくなってしまう。』これが書き出し部分の全部だ。大麻幻覚症状の一つともいえる、格子—トンネル定型幻視（図 1）。これは基調は青色であるが大麻の摂取量によって、あるいは時間の経過によって青色から赤色に変わる傾向がある³¹。恐らく黒色は青と赤が混ざって紫が黒く見えたのだろうか。

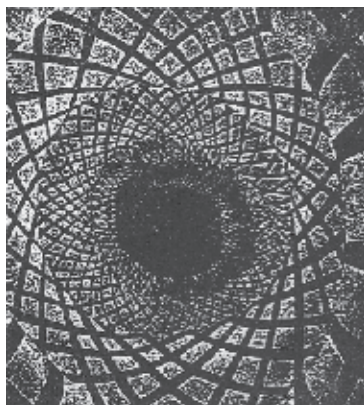


図 1 大麻幻覚作用の 1 つ。格子—トンネル定型幻視。基調は青であるが THC の投与量増加、時間の経過により赤色となる傾向がある^{11, 31}。

主人公は恐らく経口よりも吸煙によって大麻を摂取したものと考えられるので、図 2 に大麻（テトラヒドロカンナビノール、THC）の摂取量と精神作用、吸煙と経口の比較を示す。主人公の中毒の程度は初心者ではない。だからと言って、強度の中毒者でもなく中程度と思われる。これは全文をみての我々の感想である。明らかな大麻精神病型ではない。この小説は前にも若干ふれたように、「認知症の祖母の面倒をみるために大都会から田舎に舞戻った大麻中毒の孫」を主人公としたこの小説であってみれば中程度と見る他はない。大麻はしばらく中止するとフラッシュバック現象や久しぶりに吸引すると頭にガツンと走るように衝撃的な作用も現れるので、この限界は科学的にも判断は難しい。

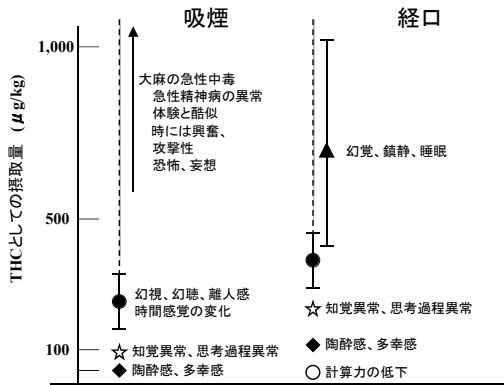


図2 大麻 (THC) の摂取量と精神作用。吸煙と経口の比較。
大麻草中には THC として 0.1 ~ 100 mg を含む¹¹⁾。

ところで、この小説はただ単に大麻中毒者を扱ったものではない。今日問題とする超高齢化社会と介護を題材としているところにユニークさがあり、これが芥川賞に選ばれた第一の理由であろう。さて、プロローグを終えた段階で大麻の薬理・毒性作用を述べる前に、一般的に幻覚とはどのように捉えられているか。まず初めに、広辞苑から出発してみよう。広辞苑には幻覚について、「対象のない知覚。例えば、実際に物が無いのにその物が見え、音がないのにそれが聞こえるという現象。幻覚におびえる。幻覚剤。」との注釈がついている。いわゆる幻視、幻聴をさす。また、別の辞典(薬学大辞典³²⁾)によれば「精神障害の際にみられる精神症状の一種で外界刺激がないのに主観的に知覚体験を生じる現象をいう。知覚の種類により幻視、幻聴、幻臭などに区別される。幻覚は、本人は真正な知覚と確信しており、夢にみる表象像とは異なる。」大麻、LSD (リゼルグ酸ジエチルアミド)、メスカリンなどは精神異常作用(発現)薬といい、幻覚、妄想、思考の障害、気分の変化などを惹起させる。

本文に戻ろう。大麻中毒者である主人公は恐らく、上記の症状の中で Cows の Cabin Man のポップ調の音楽をラジカセで聴く。ラップ調のヒップホップ的気分で「YO、朋輩^{ニガー}」とつぶやきながら祖母の排泄物の処理をしている。正常と異常のくり返し。『一日が終わる。今日したこと一 昼間ひとりですパゲッティを食べたのと、夕方絵を描こうと思ひ立って結局描きもせず、水の色ばかり見ていたこと。その他は覚えていない。』本文中、「YO、朋輩^{ニガー}」の出る回数は 31 回に及ぶ。作者の祖母に対する介護についての思いや怒り、どうしようもない憤りが噴出する。いかにも偽善的な行為と肉親に対する真の意味の愛の行為があたかもコインの表裏のように交錯する。このような感情は普通の人びとの日常生活でも起こるが、大麻中毒者は頻繁になっても不思議ではない。『夢か、リアルか、コマーシャル・ビデオか、麻の灰より生じた言い訳か、』ここで初めて麻が出てくる。作家はやけに Eric の歌う Cabin Man を好んで聞く(飛び降り自殺者の歌と言っている)。人間は必然あるいは当然、生と死の間を行き来する生物である。どうしても薬物依存者は死へ傾く。『俺らは生きながら死んでいるやんけ』— 後にもそのような活字が出てきて驚く。実際に大麻中毒者による送電線の鉄塔によじのぼる事件も発生している。いわゆる自殺願望が強い自殺志願者となる。ここで大麻について、一般的な事柄を書いておこ

う。大麻は英名では **Indian Hemp**、原産地はカスピ海の東とされ、1 万年前は単なる野草であった。この植物の種子は穀物。事実、鳥は好んで食べる栄養源。茎は強い繊維。布ばかりでなく縄や網となる。そして重要なことは葉は薬物として利用される。独語では **Indischer Hanf**、別名インド大麻。アサ（大麻草）*Cannabis sativa* L.（アサ科の **Cannabaceae** の一品種、雌雄異株の 1 年生草本。この葉の乾燥物がマリファナ (Marijuana) である。また、樹脂はハシシュ (Hashish) という。世界中いたるところ、民族の移動に伴って流布され 各地で名称を変えて、快楽用、宗教上の儀式などに使われる。大麻の科学は複雑である。1940 年代になって初めて主成分の構造が明らかになった。化学的にはテルペン類に分類され、C、H、O からなり N を含まない。主成分として 3 種、テトラヒドロカンナビノール (Tetrahydrocannabinol, THC)、カンナビジオール (Cannabidiol, CBD)、カンナビノール (Cannabinol, CBN) を含む。今まで発見された約 80 種類がカンナビノイド (Cannabinoids) と総称されている。しかし、あくまでも幻覚症状を起こすものは THC のみである (表 1)。このものは体内に入ると肝臓中のシトクロム P450 という酵素により母化合物、THC より活性の強い活性代謝物 (Active Metabolites) を生成する。陶酔、鎮静、催眠、幻覚、時には興奮作用、そして異常行動 (上述の自殺願望など) を示す。勿論、強調しておくが、大麻の許可なしの使用は「大麻取締法」の規制を受け、処罰される。

俺が俺がと自己顕示欲をしきりに示すのも、この薬物の特徴である。本文に戻る。『・・・中略・・・悟っては迷う魂の俺^{ニガー}から朋輩へ、どうしたって嘘ばかりになるのだから聞き流してくれ。俺はシャイな男だ。スパゲッティの話は少なくとも昨日以前の話で、ひよっとするともう二年以上前の出来事だったか、或いは実際に今日、それもついさつき食べたばかりだから今の俺がむかつく胃を抱えているのか、兎も角俺が夕食に拵えたスパゲッティはトマトの酸味がきつすぎたせいで、折角の一家団欒は台無しになってしまった。《団欒》と言っても、下半身不随の祖母の自宅介護を選択した家族による《団欒》は、生活上の仕事だ。仕事は楽しんでできなければすぐさま懲罰の様相を帯びる。』自殺願望の個所をくどい様だが次に載せよう。『・・・中略・・・車で渡る度に気になった橋の天辺、アメリカの大都市に架かる巨大な橋梁だろう、』我々はこのサンフランシスコのゴールデンゲートや瀬戸大橋を連想する。『そこに男はよじ登る。足下の深みを静観し、前へ身体を倒しかけた寸前、男はでっかい油虫を見つける。』この油虫のくだりの描写はリアルで読者を魅きつけるが、あまりにも長いので省略する。『・・・これが鉄橋の下から聞こえる誰かの声だ、「実はこの国の自殺志願者は年々増加しているらしい」—精神科に通う友人 (彼もまた大麻中毒者かと読者はいらぬ憶測までしてしまう。) が日曜の午前四時半に電話を寄越し、打ち明けるように語り始めたことがあった。・・・中略・・・俺らは生きながら死んでいるやんけ・・・もしお前の自殺する日が決まったら、あらゆる私物を売り払ってその金を俺の三菱の口座に振り込んでからにしてくれ、死体は金を使わんが、俺はマリファナを買うために生きてるんや・・・』、『挙げ句、この俺には何の音沙汰もなし！俺は気狂い相手のカウンセラーか？ オア (or?)、俺を気狂いと思ってるのか、朋輩？』。我々は大麻中毒にはシツコサ、執念、そしてアキラメ。この輪廻がめまぐるしいことを逆にこの小説を通じて知った。そういえば大麻の動物実験でこういう場合がある。興奮と鎮静は動物実験のラットの **Mouse Killing Behavior** (マウス噛み殺す行動、ムリサイド、植木昭和九大教授, 1978) に酷似する。主人公は常に不安と焦燥 (躁) の中にあり、それから逃れるために介護と音楽と、や

表 1 大麻主成分の薬理毒性作用と活性本体の概要¹⁾。

薬理作用	大麻の活性本体
鎮痛、鎮静 鎮吐 運動失調 カタレプシー惹起 (図 3) 自発運動量抑制 脳神経ペプチドホルモン分泌阻害 脳波 (脳電図) 効果 体温下降 ムリサイド 眼圧低下 アンフェタミンとの相乗作用 心臓血管作用 内分泌攪乱作用 他の中枢系薬物との相互作用	Δ^9 -THC Δ^8 -THC
バルビツレート睡眠延長 抗痙攣 他の中枢系薬物との相互作用	CBD (一部 Δ^9 -THC)
角膜反射消失 ムスカリン作用 アトロピン様作用	不明 (一部 Δ^9 -THC)
その他知覚変化と幻覚作用	Δ^9 -THC 他

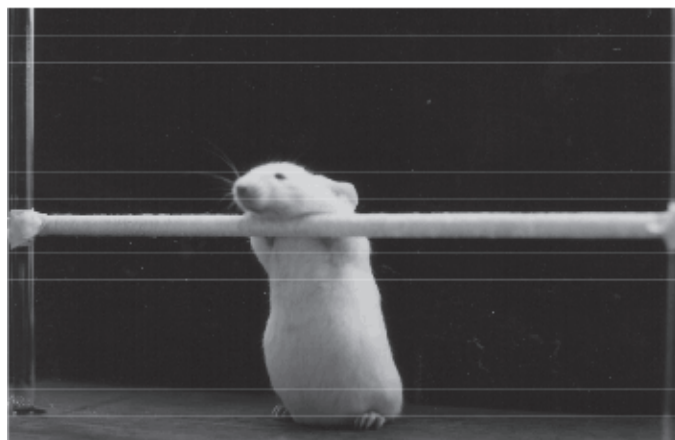


図 3 マウスカタレプシー惹起作用。 Δ^9 -THC を 10 mg/kg 静脈内に投与したマウス。高さ 5 cm の水平のバーに前肢をかけたままの不自然な姿勢

り場のない不満、悔恨を友人や社会（の不合理）にぶっつける。時には母や叔母、親戚にも。介護は単に心のうさを晴らすための、時間稼ぎかもしれない。大麻中毒特有の移り気、情緒不安定の様子が文中のいたるところにみられる。それはあたかも単独飼育のラットに似ているといえればよいか。Grinspoon はいう、「大麻は地獄へ通じる道だと警告するものもあれば、天国へ導く」³³。世界における大麻自由化の動きはこの一方をさしている、集団の要求の叫びだ。『・・・中略・・・もしこんな電話なら、新聞の自殺記事を切り抜いて毎日送りつけるがね、意地でも。医者からもらう気持ちいい薬を俺にもマワせて 100 回は言ったはずなのに・・・』大麻独特の執拗な行為、行動、拳動が目につく。一般に大麻の幻覚作用には 8 つの段階があるという（表 2）。多幸感、興奮、思考の分裂、時間と空間感覚の錯誤、聴感覚の鋭敏化、音楽への効果、固定観念、情緒不安定、衝動的行動そして既述の幻視、幻覚である。これらを総合分析すれば、主人公はこれらのどれかに符号する。興奮は、時には思考の分裂がおこり、夢と現実の倒錯。現在、過去、未来の時間的混乱。ごく最近のことが思い出せない。50 代、60 代ならこんなこ

表 2 大麻の幻覚作用の 8 つの段階¹⁾。

段階	精神状態	内容
I	多幸感	全身で感じる喜び。心の安らぎを伴う幸福感、満足感。快樂主義者、億万長者、常勝の賭博師、大成功者になったような気分。
II	興奮、思考の分裂	異常観、夢と現実の倒錯、現在・過去・未来の混乱、最近のことが思い出せない。
III	時間と空間の錯誤	実際の時間よりも長く感じる、身体浮揚感、遠くのものが近くに見える、物体の歪み。
IV	聴感覚の鋭敏化、音楽への効果	音楽による想像の進展、喜怒哀楽の顕在化、周囲が騒がしく感じる。
V	固定観念	妄想の発現、忘れていたことを思い出す。
VI	情緒不安定	決断力、思考力の低下。無気力、無関心と思うと逆の突発的な判断を示す。集中力の低下。
VII	衝動的行動	開けた窓をみるとそこから飛び降りたいという様な感情発現。過度の興奮により頭の中が混乱。挑発的、暴力的、無責任な行動、行為に走る。
VIII	幻視、幻聴	興奮状態が極度に達し、恐怖状態に陥る。爆発的な色彩、幾何学的図。

とはざらだが大麻中毒者はひどい。注意散漫、自動車運転の際の距離感もそうだ。従って、単独運転の時よく衝突事故を起こす。平成 26 年 (2014) に頻発した危険ドラッグ、MDMA 等もそうである。『・・・中略・・・それから、社会保険協会に、介護器具貸出補助金の件で電話した。』これでモブ・ノリオは実際に祖母の介護をしていることが分かり、反面、大麻を吸っていることも窺い知ることができる。『・・・中略・・・俺は珍しくくつきり力強い線で天地が完全に倒立した家を描き、その家の中では三人の人間が真っ直ぐ立って両手を上げて笑っていたんだ。』このような描写はミロやピカソでもしないだろう。かつて我々の一人 (山本) は、ポーランドの本屋で LSD や麻薬をやっている画家の絵画を見たが、その中には気持ちが悪くなるような建物や人物を見た。ムンクの「叫ぶ人」も見ると異常感覚におそわれる。前述の「笑う」という情動 (Behavior) は大麻中毒者によくみられる。モロー (1945) は「One will feel happy and gay, and one might have a few bits of uncontrol laughter」発作的な制御不可能な笑いを自分の体験 (ハシシュ、THC として 35 mg 相当の大麻樹脂) から報告している。大麻パーティーは集団の笑いの中で開かれる場合が多い。

『・・・中略・・・当時俺はマリファナ以外の事、ましてや家族のことなんてどうでもよかったし、・・・』ここでモブ・ノリオは大麻常習者であることを自ら告白する。しかし、主人公は時には真面目に祖母とつきあい、失禁のはての寝間着を毎晩深夜 2 時、3 時に穿き替えさせる。『・・・中略・・・毎晩独りで音と大麻吸引に耽っていた俺は。』いつのまにかけなげに祖母を介護する。この様な表現が随所にみられ、読者がこの小説が茶川賞なのだとしばし実感させられる部分でもある。平成 26 年 4 月 15 日、ついに日本は 4 人に 1 人が 65 歳以上という超高齢化となり介護は社会問題となり、介護を介して家族間の摩擦、不和、軋轢を生み、暴力、放火、心中、自殺、他殺という最悪の事態を招く。『・・・中略・・・YO、^{ニガー}朋輩、俺は大麻を吹かしながら、俺の墓穴^{はかあな}を掘り続けよう。』乱暴な、眩みや独り言が続く。『・・・中略・・・何しろ俺ももう三〇だ、否、二九か、運動選手なら寿命を終える年齢なんだからな、俺と来たらまだ何者でもない、それどころか、何者かになることが人生のすべてであるかのような思考をおれは拒絶する、何者でもない俺をそのまま放っておいてはくれぬ言葉は、誰かが社会から受けた抑圧をそのまま他の誰かにぶつけ、そして順送りに俺の所までやってきたのかとすら思えるのだ。YO、^{ニガー}朋輩、俺は・・・』句読点のない、やや読みにくい長文である。Grinspoon³³ による本明寛監訳の「不安の分析」を読むと、マリファナと幻想の世界が読めてくる。『・・・中略・・・「一人でできるんやったら、なんぼでも結婚しますねんけどねえ俺は社会性を保つためには道化になろう、敵は個人じゃない、その背後に聳えるケチな言葉のピラミッドだ。』主人公は社会主義をとくアナーキストだ。或いは その類いである。しきりに、俺は、俺はと、自己主張を繰り返す、そして『息が詰まるまでハシシュを吸いたいぜ、朋輩、』と眩き、前述したあの大麻クラブの大神所フランスのボードレールが出てくる。『おフランスのおボードレール様が怖じ気づきやがって、馬鹿馬鹿しくもワインなんぞと比べられて劣位に置かれちまったあのハシシュをな。』(現文のまま おや様に注意) 気は小さいくせにやけにプライドが高く事大主義がチラチラ顔をのぞかせるのも大麻中毒者の特徴なのか。そして『ジグザグに翅の粉を飛び散らす蛾を台所の硝子戸に追いつめて潰した。』残酷性は人間なら誰しも潜在的に持つかが、これに関連する事件として、「あるオランダ人の男性がかつての妻であった日本女性の母親を、そばにあったスノーボードの板でなぐり殺したという埼玉県でおこった事件」を思い出す。この被

告はひどい大麻依存者であった。筆者らがかかわった事犯である（平成2年（1990）頃）。『もし、俺が昆虫学者になっていたら、』とファーブルの昆虫記を想像させるくだりもでてくる。かと思うと麻の種を裏庭に埋めたりしてアサの栽培のまねをする。但し、アサの発芽が大麻所持法に触れることも知っている『単なる植物の自然の摂理に適った発芽が犯罪者誕生の瞬間に重なるわけだ。』と、実際はこの種子はアサではなくニラだったと読者の予想を裏切る。祖父を主人公にして毒草話や大雀蜂話など、蝮 空気銃による鳩の死の話、一本橋が燃えた話、実の息子（主人公の父）の死に際して、棺桶の出張った手首を折って入れるとわめいたこの祖父も13ヶ月前に死ぬ。『「おじいちゃん、麻ってヤマのどこら辺に生えてんの？」』あくまでも主人公は麻に御執心である。そして「木綿以前の事」という単行本を持ちだし、博識ぶりを発揮する。それを引用させて貰うと以下となる。『・・・中略・・・神事や衣料に用いられたその植物が自生し続け密かに群落を成すやも知れぬ、・・・麻畑・・・長煙管に麻の葉を燻らせ・・・麻の葉を燻して吸うたら、調子よなんねん・・・田螺田鰻泥鯉の英才教育食・・・ASSHOLE、』社会に対する不満や不条理に対するの憤懣やるかたなき様相、機械万能主義に対する反発。『どうしようもない苛立ちを？・・・介護ロボット』、テクノロジーに対する不信、そして蛮行の話の数々（細竹の先で蟬を突いて殺すなど）。

『故に俺はこの箱（テレビのこと）に仕掛けられた光線銃が放つ眩しい光を見つめるのか、』ここで想起されるのが、大麻の幻覚症状の一つ、格子 — トンネル定型幻視である。また、水中遊泳の現象でもある全てが屈曲してみえる建物や遊園地の観覧車、そして小説の文章は『泥色の屈曲した硝子はゆるやかな凸面に男の影を反射させる — 身体の軸がずれたままソファに身を沈める男の猫背だ。瞬きせずに凝視すれば、のっぺりとした泥岩を思わせる結晶の底に俺の部屋は無限の奥行きを伴って水平に没している。沈黙をするブラウン管の向こう側からこちらを覗き込む男を俺は見た。』これはよく覚せい剤によって見られる誰かに監視されているという強迫観念ではないか。我々は大麻には以前から覚せい剤、睡眠剤と幻覚剤（LSD 様）の三つの作用が同時に出現する（3様別個に出る場合もある）と云っているがこの小説がよく表現している。『中の男の様を窺うことで男の次なる動作を読み、それに従い首をふらふら揺らす不審者がこの俺だった。』客観と主観、他者と自分の境界が定かでない『・・・中略・・・またしても黄色の霞か靄が目玉の表面を飛ぶ。・・・中略・・・弄んでいたつもりがその黄砂の幻覚に振り回される己を初めて知ったのだ、・・・中略・・・ありもせぬ色彩に現を抜かして。』ここで句読点。常人にはあらぬ文章、普通大麻中毒者の幻視の色は青か赤というがここで黄色である。我々にとって黄色というのは新発見である。ひょっとしたら虹色全部が出現しているのかも知れない。ありもせぬ色彩という表現がこれを物語っている。『突然、俺の腹から出た声を聞いた。誰の耳にも「死ネ！ 死ネッ！」と聞こえるはずの不意の歌、』『俺をより危うい別の現実へと踏み外させる、』科学者の端くれである我々としては理解に苦しむ。『俺に制御できない力が舐めさせる苦い空気、』『「死ネ、死ネ、死ネ」』が二度繰り返される。『まるで立派なドラッグじゃないか？ 道端で売っているドラッグはOKで重度の自家中毒はNGかい、朋輩？ 未知への恐怖に俺の期待は疼き出す。』期待が疼くとはどういうことか 我々には論評する資格がない。『麻薬を嚙る場で・・・中略・・・逃げまくった挙げ句、逃避先なんてどこにもないって悟らせてくれたのは、いつだって麻薬だったか、朋輩？』ここではやけに理性的な主人公がいる。一度もお襦袢を替えたことはない俺の叔母に対するあたりは、我々にも理解できる。3つある介護

指南書には、切々と説得力がある文章がこの小説のもう1つの柱となっている。我々は文芸批評家ではない。またこの分野には資格も実力もないのでこのあたりでやり過ごすことにする。年がたって又の機会があれば書くことにしよう。しかし『責任感は気高く、義務感は卑しい、』の一行には感服した。頭を垂れたノーベル婆孝行賞の話もあるが続けよう。自己嫌悪と自己否定の連なるいくつかの俺。これは大麻で問題をおこした大麻中毒者の懺悔文に似ている。また主人公はサンプラーを叩きCDを聞く。音に対してやけに敏感である。ビートルズも大麻、長渕剛も、Askaも。LSDは色彩。画家、音楽関係者に好まれる。介護士との対話の部分にも関係する。また脱線してしまったが、文章もヒップホップ調になったことに気づく。大麻中毒者には極端な認識不調和的エゴのところがある。

ここで介護入門から一時、離れていくつかの大麻の精神作用について文献的に紹介しよう。

①ボードレールの死は、彼の精神病、ハシシュとアルコール中毒それに第3期梅毒が深くかかわっている話は有名だ。②テイラー（英名 Bayard Taylor）アメリカの作家でゲーテの「ファウスト」の翻訳者。1854年エジプトを訪問した時、彼は好奇心から大麻に手を出し、その効果を次の様に記している。「次にこの葉がもたらした感覚は一肉体的には絶妙な身の軽さと快活さ、そして精神的には、もっとも単純な身の回りの品がすばらしくはっきりとこっけいに感じられたことである。その状態が続いた30分間に、私はかつてないほどその葉に支配されて、非常にクリアな感覚はあるのに、経験した千変万化をよく覚えられなかった。私は神経線維の全組織に広がったすてきな感覚をよく注意してみた。ワクワクするような感動の波のひとつひとつが私から卑俗で物質的な性質をワクごと奪い去ろうとし、私という実体はもはや大気の水蒸気と同じくらいぼんやりとしてみえた。エジプトの夕暮れの静寂さの中に1人座りながら、私はわが身がもち上げられてナイル川を波立たせる最初の風に運びさらわれるのでないかと思った。こうしたことが続いている間、私の回りにある物は皆、奇妙で異様な様相を呈して一わたしは突然長い笑いの発作におそわれた。幻覚はそれが現れた時と同じように徐々に消えていき、私は軽い快いねむ気におそわれ、そのあと深いさわやかなねむりに落ちて行った^{28, 29, 33}。」この状況はしばしば文中に出てくる大麻の鎮静、催眠作用である。③Walter Bromberg（ニューヨークの精神科医、1934）は「中毒は喫煙後10～30分間続く不安状態から始まる。その間使用者は時々・・・中略・・・死の恐怖と落ち着かない気分と昨日亢進に関連したぼんやりした不安に悩む。数分で平静になり、まもなく明確な陶酔感にひたり始める。おしゃべりになって・・・意気盛んとなり、陽気になって（大麻パーティの様相）・・・四肢が驚くほど軽く感じられ、・・・始めは際限なく爆発的に・・・時にはちょっとした刺激もなしに、笑い、自分の会話が機智にあふれ、輝いているような印象を持つ・・・。次から次へと流れ出るアイデアは思考と観察が明晰な印象を与えるが、考えたことを思い起こそうとすると混乱が生じる。・・・そして幻覚を見はじめる。・・・地図や形や人間の顔や非常に複雑な絵にどんどん変化してゆく光線のひらめきや無定型のあざやかな色彩（このなかに黄色もあるのか）・・・。2時間は続いた長くも短くも感じられる時間のあとで、喫煙者はねむ気を催し、夢のないねむりに落ち、生理的な後作用もなく目ざめ、中毒中に起こったことをはっきりと記憶している^{28, 29, 33}」と記述している。2時間の感覚はゆがめられ、10分が1時間に思われる。奇妙なことにしばしば意識の分裂があり、そのために喫煙者は陶酔を体験している間、同時に自分自身の中毒の客観的な観察者でもあるのである。「介護入門」の中にも流れの中でしばしばこの様な描写がみられる。この客観性は大

麻は大したものではない。アルコールやタバコほどではない。アルコールは記憶の喪失、タバコは初期には記憶の中断がおこる。パラノイ德的思考にとらわれていながら、同時にそれについて理性的、客観的に笑ったり、あざけったりし、ある意味では楽しんでいる。主人公もまた祖母の介護を楽しんでいるようにもみえる。恰も、大麻をやれば嫌がる介護だって真面目にやれるんだとも受取れるように読者にも思えてくる。また Bromberg は付け加えている。「大麻の多くの経験者がどんなにひどい中毒状態にあっても公的には完全に真面目なふるまいをしようとするという事実を説明しよう^{28, 29, 33}」と。大麻は LSD、DMT、メスカリン、ペヨーテ、シシロシビン（毒キノコ）などと同様な効果があるが明らかに違いがみられる。効力は弱い。我々はこの効果は総合的にみて少量の幻覚、興奮、睡眠剤を同様に服用した時と似ていると主張している。だから大麻中毒者は他のより強い麻薬（ヘロイン、コカイン）への道を辿ると警告しているのである。日本は資源のない国家である。若者がこのような薬物に走ると大げさではなく、国家存亡の危機に陥る可能性があると言いたい。大麻は大したことがない、いつでも止められる。定職にもつかず、この小説の主人公のように日ながら大麻を吸い、重要ではあるが肉親の老人の介護のみに従事するとしたら肌寒く感じる。大麻解禁、アメリカ、コロラド州では最近（2014）自由化されたが、我が国では自由化こそさらに大きな社会問題となろう。文学はかくも危険性にみちた芸術なのか。

再び本題に移ろう。『俺を震撼させる事件が起こった。・・・大略・・・ 悲劇の豚小屋の中で人は豚になり、汚臭のぬくみに暖をとりたがる。・・・これは俺の人生へのテロリズムでもあるのだ・・・《豚の思考》・・・日々俺死ぬ、故に我あり。我が人生に価値なし。・・・』などとのカントの「我思う故に我あり」をもじった戯言が随所に出てくる。そして『介護入門 一、《無言で介護するべからず。》我々の1人も102才（平成22年、2012）の義父を介護施設で天国に送ったが、訪れた時には家内は爺ちゃん、元気、今日は天気よと手を握り、額をなで、眼瞼を親指と人差指で開き声をかける。この下りにはまさかこの主人公が大麻中毒者かと疑う。そして小説は大麻吸引の話となる。『・・・中略・・・、後先考えず吹かした《ヒラギシ・マトリックス》のジョイントで俺は気分良くなるどころかそれが親にばれぬかと気が気でなく、しかも・・・中略・・・ カンナビスト（大麻吸引者：著者注）の影を襲う白い眩暈。・・・中略・・・俺はもう自分が誰なのかもよくわからず、・・・逃げれば逃げるほど破綻の足音、気配は忍び寄る・・・俺は出口のない考えに填らぬよう。・・・戸惑いが熱い塊になって押し寄せ、皮膚の表面を焦がす。俺は大麻の作用を抑えるため、・・・昼白色の光、俺の血になった道産子の麻（この意味するところの大麻は北海道の野生の大麻草か？）・・・麻の灰を運ぶ血がデコの内側に集まって前頭葉を熱く動かすのを感じ、・・・死んでいた祖母の黒目の奥から、一筋の光の矢が俺に近づき向かってくるように見えた。・・・大麻臭い熱い息で何度もむせび・・・また別の大麻を吸った日・・・またしても大袈裟に泣いてしまった。』（このような喜怒哀楽の状態は大麻の新しい作用か。それとも正常な人間そのものであろうか。）『一麻の葉は、いつも別の角度から祖母と俺との現実を示唆してくれた。』この言葉がモブ・ノリオの最もいいかったものであろう。『俺はお粗末な俺の命を笑いながら死んで行きたい、・・・俺が死ぬのだから、家族が死のうと痛くも痒くもない、』これほど愉快的死には方はない。『・・・俺はあつけらんかと死ぬことで・・・死の間際、俺の網膜にこびりつく残像は・・・喜んで腐れ死んでやろう、文化汚染との心中を、ha、ha、・・・俺は集中治療室の死の淵で沈黙していた祖母の冷たい四肢

をさすり続けた。・・・「死ネ、死ネ、死ネ」と出た俺の言葉・・・俺は音に狂う俺の浅い眠りを眠る（これは大麻吸引の睡眠効果ではないか）、・・・俺は疲弊した俺の抜け殻を持って余して死んでいる。死んでいる俺を忘れるためにか、死んでいることより生々しい色で知るためにか、夜な夜なタールでべとつくパイプに大麻を燻らせる。また黄色が飛びやがる!・・・麻の大波に身を巻かれ、死んでいる俺を見つめ直す。・・・死んでいる俺はグラム 8500 円（当時大麻の相場）の徹夜から、生きる光を探すのだ。YO、・・・自殺寸前の野郎がこいつに何て叫び返すか、教えてやろう。“I WANNA RIIIIIIISE!・・・”YO、朋輩、俺からは以上だ。』でこの小説は終わる。先に記述した様に大麻の最悪の症状は大麻精神病だという学者もいる。その行動は自殺願望、この小説に死という語が実に数十回出てくる。祖母の介護を杖として生きてきたこの大麻中毒者は、祖母の死によって絶望の淵におとされる。

第 3 節 おわりに

以上、モブ・ノリオ著の介護入門を大麻の科学の面からこの小説を我々なりに解説したが、帯に短し襷に長し、中途半端に終わった感がする。しかし、はっきり言えることは、作者は大麻経験者であることは確かで経験なしでは、たとえ小説家といえどもこうは書けないだろう。大麻がこのような形で介護に利用されることに驚く。これも小説であればのことではあるが、しかし、人間の深奥をつく小説であることに間違いない。「大麻取締法」にふれることを抜きにして — YO、朋輩。

このような大麻文学が流行しないことを願うばかりである。薬物乱用の防止をライフワークとしている我々にとって。

謝 辞

本研究は吉村英敏九州大学名誉教授、成松鎮雄岡山大学教授、松永民秀名古屋市立大学教授、山折大信州大学准教授の他、教室大学院修士生などの協力のもとに遂行され、現在も続行中のものである。ここに深謝する。

参考文献

- 1 山本郁男、「大麻文化科学考（その1）」大麻の文化，北陸大学紀要，14, 1-15 (1990).
- 2 山本郁男、「大麻文化科学考（その2）」続大麻の文化，北陸大学紀要，15, 1-20 (1991).
- 3 山本郁男、「大麻文化科学考（その3）」大麻と法律，北陸大学紀要，16, 1-20 (1992).
- 4 山本郁男、「大麻文化科学考（その4）」漢方薬として的大麻，北陸大学紀要，17, 1-15 (1993).
- 5 山本郁男、「大麻文化科学考（その5）」日本薬局方と大麻，北陸大学紀要，18, 1-13 (1994).
- 6 山本郁男、「大麻文化科学考（その6）」大麻の植物学，北陸大学紀要，19, 1-11 (1995).
- 7 山本郁男、「大麻文化科学考（その7）」大麻の栽培，育種，北陸大学紀要，20, 9-25 (1996).
- 8 山本郁男、「大麻文化科学考（その8）」大麻の成分，北陸大学紀要，21, 1-20 (1997).
- 9 山本郁男、「大麻文化科学考（その9）」大麻の鑑定と分析，北陸大学紀要，22, 1-16 (1998).
- 10 山本郁男、「大麻文化科学考（その10）」カンナビノイドの立体化学と合成，北陸大学紀要，

- 23, 1-12 (1999).
- 11 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 11)」 大麻主成分の毒性及び薬理作用, 北陸大学紀要, 24, 1-23 (2000).
 - 12 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 12)」 大麻 (マリファナ) の作用とカンナビノイド受容体, 北陸大学紀要, 25, 15-26 (2001).
 - 13 山本郁男, 大麻の文化と科学, 廣川書店 (2001).
 - 14 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山折 大, 宇佐見則行, 松永民秀, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 13)」 大麻主成分カンナビジオールの毒性発現機構, 北陸大学紀要, 26, 7-15 (2002).
 - 15 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 14)」 大麻主成分 THC の活性代謝物, 北陸大学紀要, 27, 1-11 (2003).
 - 16 山本郁男, 井本真澄, 岩井勝正, 「大麻文化科学考 (補遺)」 日向の大麻, 九州保健福祉大学紀要, 5, 241-245 (2004).
 - 17 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 15)」 大麻からの創薬-治療薬への応用 -, 北陸大学紀要, 28, 17-32 (2004).
 - 18 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 16)」 大麻と事件-最近の動向-, 北陸大学紀要, 29, 13-21 (2005).
 - 19 渡辺和人, 木村敏行, 舟橋達也, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 17)」 乱用薬物防止教育, 北陸大学紀要, 30, 13-22 (2006).
 - 20 渡辺和人, 木村敏行, 山折 大, 竹田修三, 宇佐見則行, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 18)」 ヒトにおける大麻主成分カンナビノイドの代謝, 北陸大学紀要, 31, 1-11 (2007).
 - 21 渡辺和人, 木村敏行, 山折 大, 竹田修三, 宇佐見則行, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 19)」, カンナビノイド生合成経路-再考, 北陸大学紀要, 32, 1-11 (2008).
 - 22 渡辺和人, 木村敏行, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 20)」, 大麻に関する諸外国の法規制, 北陸大学紀要, 33, 1-9 (2009).
 - 23 渡辺和人, 木村敏行, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 21)」, 合成カンナビノイドの法規制, 北陸大学紀要, 34, 1-10 (2010).
 - 24 渡辺和人, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 22)」, 内因性カンナビノイドの生合成および代謝, 北陸大学紀要, 35, 1-9 (2011).
 - 25 渡辺和人, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 23)」, カンナビノイドの抱合型代謝物, 北陸大学紀要, 36, 1-10 (2012).
 - 26 渡辺和人, 山折 大, 山本郁男, 「大麻文化科学考 (その 24)」, 大麻の呈色反応, 北陸大学紀要, 37, 1-9 (2013).
 - 27 山本郁男, マリファナは怖い～乱用薬物～, 日本薬学会編, 薬事日報社 (2009).
 - 28 山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 渡辺和人, 大麻はなぜ怖い?, 化学, 64, 18-25 (2009).
 - 29 山本郁男, 大麻～光と闇～, 京都廣川書店 (2012).
 - 30 モブ・ノリオ, 介護入門, 文藝春秋 9 月号, p.386 (2004); 「介護入門」, 文春文庫 (2007).
 - 31 Siegel, R.K., サイエンス, マリファナと幻覚, 日本経済新聞社, p. 8 (1977).
 - 32 薬科学大辞典, 第 4 版, 廣川書店 (2007).
 - 33 Grinspoon, L., 本明寛監訳 別冊サイエンス, 心理学特集 不安の分析, 日本経済新聞社, p. 51 (1972).